

北周趙王「道會寺碑文」について

——聖武天皇『雜集』の示す仏教再興——

安 藤 信 廣

はじめに

隋の煬帝の大業三年、日本の推古天皇即位十五年（六〇七）、倭国（日本）の使者が隋に至った。聖德太子が企画したとされる遣隋使である。そのときの「使者」、即ち正使小野妹子の口上を、『隋書』は次のように伝えている。

大業三年、其王多利思比孤、遣使朝貢。使者曰、「聞海西菩薩天子、重興佛法。故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。」

〔大業三年、其（倭国）の王 多利思比孤、使を遣はして朝貢せしむ。使者曰く、「聞くならく 海西の菩薩天子、重ねて佛法を興すと。故に朝拜せしめ、兼ねて沙門數十人をして來たりて佛法を學ばしむ」と。〕

〔『隋書』卷八十一、列傳第四十六。東夷・倭國）隋において仏教が再興されたことを知り、その仏教を学

ぶために数十人の僧侶を帶同した、というのである。仏教を介して中国との国際関係を成立させようとした倭国（日本）の意図は、この口上の中に明瞭に読みとることができ。逆に隋（中国）の側からするならば、仏教再興を成し遂げた王朝として自らを描き出すことによって、国内の統一だけでなく、国際秩序の安定をも創り出したと言える。ところで、この仏教を再興した「菩薩天子」は当時の煬帝（楊廣）ではなく、その亡父、文帝（楊堅）を指していたとする説がある。¹⁾「菩薩天子」が煬帝を指していたとしても、少なくとも、そのイメージを先んじて形成したのは文帝だった。隋の高祖・文帝（楊堅。五四—六〇四）が、北周の武帝（宇文邕）²⁾によって弾圧されていた仏教の再興を果たし、隋・唐の仏教文化興隆の原点となったことは、周知の事実である。³⁾北周武帝の廃仏は、歴代の仏教弾圧のなかでも、きわめて徹底的なものだった。仏教者、貴族、

庶民を問わず、その廃仏への反感・抵抗は根深かった。北周武帝の逝去の後、急速に権力の中樞に登場してきた楊堅は、様々な画策とともに仏教の庇護者としてふるまうことにより、自己の権力基盤の強化に成功した。

右の一連の過程が事実であつたことは確かである。だが、その原点たる仏教復興を最初に意図し企画したのは、果たして隋文帝だったのだろうか。この最も根本的な問題に別の可能性を提起する資料が日本に残っている。聖武天皇宸翰『雜集』中の「周趙王集」であり、ことにその中の一篇「道會寺碑文」である。本稿は、この「道會寺碑文」を資料として、北周末の仏教復興の動きの一端を解明し、その動きを担った人間の思索について、考察するものである。

一 聖武天皇宸翰『雜集』「周趙王集」と趙王宇文招

聖武天皇宸翰『雜集』は、中国六朝・初唐の仏教関係の文章を、聖武天皇が天平三年（七三二）に筆写した文献である。天皇没後に正倉院に施入され、現在まで伝存している⁽³⁾。その中に、「周趙王集」七篇（うち一篇は事実上四篇から成っている）、全体を十篇と数えることができる）がある。これは、北周の趙王宇文招（字、豆盧突^{あふと}。五四五？—五八〇）の文集からの抜き書きであり、短詩一首をのぞ

いて中国では完全に亡失した趙王の文章を伝える、恐らく唯一の資料だろう。

趙王宇文招は、北周の事実上の創業者宇文泰（文帝）の第七子であり、北斉と北周に分かれて争っていた華北の再統一を為しとげた武帝宇文邕の弟である。北周の建徳五年（五七六）には兄の武帝に従つて北斉を討ち、翌六年（五七七）、北斉を滅して華北統一が成つたとき、功によって上柱国となつた。

しかし翌宣政元年（五七八）、武帝が急逝した。その子宣帝（宇文贇^{いん}）が即位すると、宣帝は叔父や功臣たちへの猜疑心から、彼らを殺したり排除するようになった。かわつて権力の中樞に登場してきたのは、宣帝の楊皇后の父、楊堅（隋文帝）である。宣帝が荒淫のために大象二年（五八〇）に急逝し、その幼子靜帝（宇文衍）が皇位を継承すると、楊堅が政治の実権を握り、帝位をうかがうようになってきた。そのため趙王宇文招は、楊堅暗殺をくわだててが失敗し、同年七月、一族もろともに誅殺された⁽⁴⁾。

趙王は若年のころから庾信（五一三—五八二）について詩文を学び、その強い影響を受けてきた。その文集は「十卷」だった（『周書』本伝）というが、中国では亡失してしまつた。その「十卷」の一部が、聖武天皇宸翰『雜集』

中に残されていたのである。⁽⁵⁾

二 「道會寺碑文」の問題点

『雑集』中の「周趙王集」については、すでに小野勝年氏に「宸翰雑集」所収「周趙王集」釈義(一)(二)、『南部仏教』第四十一号、第四十二号。昭和五十三年、同五十四年)があり、訓読と注釈が示されている。また『雑集』全体の翻字をし句読を施した労作として、合田時江氏編『聖武天皇「雑集」漢字総索引』(清文堂、一九九三年十月)がある。それらの恩恵を受けて、筆者も「周趙王集」の全訳を試み、「聖武天皇宸翰「雑集」所収「周趙王集」注釈(Ⅰ)」「(Ⅲ)」(『東京女子大学日本文学』第九十三号、第九十四号、第九十六号。平成十二年、同年、平成十三年)を発表している。そこにおいて筆者は、「周趙王集」の大部分に注を付し全訳を行った。だが、「周趙王集」の中の最長編であり、且つ『雑集』全体の中でも最長編である「道會寺碑文」には様々な問題点があり、いまだに全訳を完了していない。その問題点については後述するが、まずこの「道會寺碑文」の内容を、筆者なりに要約しておきたい。碑文全体は六段落に分けることができる。(その後に、六十句からなる銘がつづいている。銘については後述。)六段落

の内容は以下の通り。(後掲《資料》参照)

第一段落(1行「若夫」) 6行「遼遠」)

中国固有の思想・信仰は曆数・陰陽に通じていて偉大だが、それよりも、仏教の教えははるかに深遠である。

第二段落(6行「昔者」) 14行「江左」)

昔、インドにおいて釈迦が説法をすると、人々はみな各地より来聴した。釈迦が入滅すると、人々は仏像を製作し寺塔を建てた。そのため仏教への信仰が広まり、後漢の明帝、呉の孫権らのころ、中国各地にも及んだ。

第三段落(15行「皇帝」) 32行「家」(寂) 滅)

「皇帝」が即位して数々の吉瑞があり、万国から朝貢があつた。皇帝は聖神にして多才であり、儒教のみでなく仏教をも人々に勧めている。

第四段落(32行「乃逮」) 52行「實刹」)

皇帝はかつて「天會」寺と呼ばれていたこの寺に出御された。この寺は以前「某官姓名」の建てたところだが、長く荒廃していた。それが再興され莊嚴されたのだ。「寺主」たる「比丘某甲」は、この寺をりっぱに守っている。

第五段落(53行「皇帝」) 62行「斷見」)

「皇帝」は再興されたこの寺の中をめぐり、「宝座」

に登って説教した。小乗の説を論破し、大乘の義を明らかにした。人々はそれを聞いて喜悅した。

第六段落（62行「爾其」～71行「銘曰」）

この寺は都城（長安）に近い景勝の地にある。皇帝がこの寺を訪れ説法を行ったという「希有」なる慶事を記して碑にきざむものである。

おおよそ右のように、この文章を要約できると考える。ここには見逃せない問題がある。

第一に、この文章は筆写の錯脱が多く、文意が把握しにくい。⁽⁷⁾しかし今回はこの点には触れない。第二に、題名に見える「道會寺」の所在が分からず（第六段落にヒントはあるが）、また文中に出てくる「天會寺」との関係が分かりにくい。第三に、第三、第五段落に二度現れる「皇帝」が誰を指すのかが分からないために、全体の構成が見えにくい。

趙王が長く仕えてきたのは、兄武帝である。従って「皇帝」が武帝であるならば何の問題もない。しかし、それはあり得ない。なぜなら、武帝は、厳しい仏教弾圧を行った当事者だからである。また建徳三年（五七四）の廃仏令以前に、儒仏道三教の論争等を行わせたことはあるが、少なくとも武帝自らが仏寺に赴いて仏教を講説するなどという

ことは無かった。

第二の問題点と、第三の問題点は、からみあっている。一言でいえば、「道會寺」なる寺の高座に登って仏教について説教した「皇帝」は誰か、という問題である。それが明らかにしなければ、この「道會寺碑文」の全体像は見えないのである。

三 道會寺の所在と「皇帝」

「道會寺」という寺名自体は、他の資料に現在まで発見することができない。しかし、北周に「道會苑」という園林があったことは、確認できる。『周書』帝紀第五・「武帝上」に次のようにある。

（天和二年）三月癸酉、改武遊園爲道會苑。

（天和二年・五六七年）三月癸酉（二日）、武遊園を改めて道會苑と爲す。」

「武遊園」の位置については明確には分からないが、首都長安の近郊だったことは確かだろう。それを武帝が「道會苑」と改名したのである。従って、「道會寺」（の前身と考えられる「天會寺」）は、「道會苑」（もとの「武遊園」）の中または付近に存在していたのではないかと想像できる。

この一例だけで「道會寺」と「道會苑」を結びつけるのは危険であろう。しかし、他にも例がある。この「道會苑」は、武帝の死後、宣帝の代になると、にわかにクローズ・アップされてくる。『周書』帝紀第七・「宣帝」にいう。

〔宣政元年〕十一月己亥、講武於道會苑、帝親擐甲冑。〔宣政元年・五七八年〕十一月己亥〔六日〕、武を道會苑に講じ、帝親しく甲冑を擐く。〕

宣帝は、長安城内の旧宮よりも、自分のオリジナリティを示せる場として道會苑を好んだのかもしれない。さらに同書宣帝紀に次のようにある。

〔大象元年〕冬十月壬戌…是日、帝幸道會苑大醺、以高祖武皇帝配。醺訖、論議於行殿。是歲、初復佛像及天尊像。至是、帝與二像俱南面而坐、大陳雜戲、令京城士民縱觀。

〔大象元年・五七九年〕冬十月壬戌〔四日〕…是の日、帝道會苑に幸して大醺し、高祖武皇帝を以て配す。醺訖りて、行殿に論議す。是の歲、初めて佛像及び天尊像を復す。是に至り、帝二像と俱に南面して坐し、大いに雜戲を陳ね、京城の士民をして縱に觀しむ。〕

ここから分かるように、宣帝は、父武帝の廃仏令を、大

象元年十月壬戌の日、事実上撤廃したと言える。そして、それは「道會苑」において行われたのである。またいささか異様ではあるが、宣帝は仏像・天尊像とともに南面して雜戲を見ることによって、それを示したのである。宣帝の行為は愚劣だが、良く解釈すれば、民衆に仏教の復興を強烈に印象づけるための演出だったともいえよう。

ともかく、先に提示した二つの問題、「道會寺」はどこにあったか、「皇帝」は誰かという問題は、これで明らかになったといえる。武遊園（またはその近辺）にあった天會寺は荒廢していたが、大象元年「道會苑」（もとの武遊園）において宣帝が仏教を復興するのと前後して「道會寺」と名をかえて再興された。従って「皇帝」とは、武帝でなく、宣帝を指していると考えられるのである。

つまり、この「道會寺碑文」は、廃仏令の事実上の撤廃と仏教の再興を祝い、記念する文章だったと言えるのである。道會寺が道會苑の中にあつたのか近隣にあつたのかは、厳密には分からない。しかし、「道會寺碑文」53行目に、「皇帝」の行幸を「輦詣花園、輿廻香苑」（輦もて花園に詣り、輿もて香苑を廻る）と描くのは、明らかに道會苑のことを指すだろう。「道會寺碑文」の描くこの「皇帝」の行幸が、『周書』宣帝紀に記された、右の大象元年十月壬戌のことを指

すかどうかは分からない。しかし宣帝が道會苑を好んで訪れたことは確からしいので、別の行幸があつたと考える方が妥当かと思われる。たとえば、『周書』宣帝紀には次のような記事もある。大象二年（五八〇）正月の記事である。

二年春正月丁亥、帝受朝于道會苑。

（二年春正月丁亥（一日）、帝 朝を道會苑に受く。）

正月の朝参を道會苑で受けたのだ。道會苑はそれほどに宣帝にとって気に入りの場所だったらしい。「道會寺」がその中または近隣にあつたのであれば、行幸は一度や二度のことではなかつただろう。また荒淫で死ぬような宣帝が、大乘仏教について説教などできるかという疑問も必要ない。実際には、「皇帝」は道會寺に行幸しただけだったとしても、趙王招はそれを理想化して描き出したのだ。

四 「道會寺碑文」における皇帝の表現

「道會寺碑文」の特徴の一つは、「皇帝」の表現の圧倒的な量にある。実際、第三、第四、第五段落は、全て「皇帝」その人や、それにまつわる表現で占められている。

特に第三段落は、ほぼ全体が仏教と関係を持たず、世俗の権力者としての「皇帝」の表現に終始している。同段落冒頭にはこう言う。

皇帝沈璧握圖、懷珠受曆。

〔皇帝 璧を沈めて圖を握り、珠を懷きて曆を受く。〕

堯帝が璧を河に沈めて「握河記」を得たという故事をふまえて、天より宝曆を受けて即位した「皇帝」を称賛する。次のようにも言う。

蓬萊羽客、棄神仙戾止、渭濱隱士、捨垂釣而來王。

〔蓬萊の羽客は、神仙を棄てて戾止し、渭濱の隱士は、垂釣を棄てて來王す。〕

「神」字を、合田氏前掲書は「袖」としているが、採らない。また「來王」を、小野氏前掲書は「來」で切り、「王」を下文に続けているが、これも採らない。世間とは異次元に住む仙人・隱者さえも、皇帝のもとに馳せ参じて来る、と言うのである。ここにも皇帝権の超越性を描き出そうとする意図が読み取れる。

こうした部分には、仏教の教義との関連性は全く無い。

ひたすらに展開されているのは、皇帝権の強調であり、また人格的な皇帝への礼賛である。いわば仏教の教義とは無縁の、皇帝礼賛それ自体が目的となっている。

では、それは何故なのか。宣帝は、趙王をはじめとする叔父たちへの猜疑心から、即位直後に齊王宇文憲（趙王の兄）を殺し、以後次々に王族・功臣を殺した。そのために

北周王朝は不安定となり、楊堅の擡頭と篡奪を許すことになる。趙王から見れば、宣帝はきわめて危険な「皇帝」であった。だが、だからこそ、趙王は皇帝権を強化するため、力を尽くさねばならなかった。北周王朝を支えるためには、そして恐らく楊堅の権力介入を防ぐためには、皇帝権の強化が必要だったのだ。趙王は、自らを排斥しようとする「皇帝」のために「皇帝」礼賛をしなくてはならないという矛盾を背負わなくてはならなかったのである。

第四段落で、荒れ果てていた「天會」寺を再興し道會寺と改名したのは、主語が明示されないために分明ではないが、恐らくは「皇帝」である。冒頭に、こう言う。

乃逮斯刹、厥名天會。

〔乃ち斯の刹に逮ぶ、厥の名は天會なりき。〕

「逮」字を、小野氏前掲書は「建」として、「すなわちこの刹を建てて、それ天会と名づく」と訓読するが、それでは文脈が通らない。皇帝はこの寺を「建」てたのではなく、あくまでも「天會」寺という名のこの寺に「逮」んだ、即ち訪問したのである。従って、「乃於舊所、經始莊嚴」（乃ち舊所に於いて、經始し莊嚴す）という行為を行ったのは、皇帝だっただろう。第三段落で世俗の権力者としての皇帝が描かれていたが、ここでは、寺院の復興者としての皇帝

が描き出されているのである。

第五段落では、そこから更に進み、「宝座」に登り「大乘」の法を説く皇帝が描かれる。

法華窮子、始悟慈顏、火宅童兒、方知離苦。足使提舍恥其頭燃、納衣慙其斷見。

〔法華の窮子は、始めて慈顏に悟り、火宅の童兒は、方に離苦を知る。提舍をして其の頭を燃やすを恥ぢしめ、納衣をして其の斷見を慙ぢしむ。〕

皇帝の説教を聞いた人々は、いま「方」に「離苦」（苦を離れる）を知った。「提舍」（仏弟子の一人、舍利弗）は頭髮を燃やすなどの自己を傷つける苦行を恥じ、「納衣」、僧侶たちは来世が無いなどという「斷見」、誤った見方を慙じることになった。

ここには、北周武帝の廢仏令によって絶望的な状況下にある、自傷をくりかえしていた仏教徒たちの解放の喜びが語られている。それらは全て、「皇帝」の説教によっているのである。つまりそれらは全て、宣帝が道會寺を訪れて仏教を復興し仏教について講説したことと、それによって得られた解放の喜びを語っているのである。こうして、前段落までの皇帝への礼賛は、仏教復興者としての皇帝像の表現によって完結する。宣帝は、単に世俗の権力者なので

はなく、仏教再興を実現し仏法を宣揚する「菩薩天子」として描かれているのである。

五 「道會寺碑文」の銘

次に「道會寺碑文」末尾72行く85行の銘の内容を検討したい。聖武帝自身の筆写の脱誤、翻字の問題点についての考証は今すべて省略し、筆者の校訂により、句読を切る。訓読も筆者による。脚韻は「廣韻」による。（〈資料〉参照）

1 百非體妙 百非 妙を體し

萬德凝神 萬德 神を凝らす

空因相顯 空は相に因りて顯らかに

理寄言申 理は言に寄りて申ぶ

5 赴機曰應 機に赴くを應と曰ひ

反寂稱眞 寂に反るを眞と稱す

法身豈滅 法身 豈に滅びんや

世眼時淪 世眼 時に淪むのみ

俱迷苦海 俱に苦海に迷ひてこそ

10 熟曉良津 熟く良津を曉らん 『（眞・諄韻）

我皇御宇 我が皇 宇を御し

超茲文武 茲の文武を超ゆ

迹染俗塵 迹を俗塵に染め

15 心標淨土 心を淨土に標す
道牙廣潤 道牙 廣く潤ひ

勝幢高聳 勝幢 高く聳つ

靜監有空 靜かに有空に監み

緣思愛取 緣りて愛取を思ふ 『（慶・姥韻）

是曰人王 是れを人王と曰ひ

20 兼稱法王 兼ねて法王と稱す

惟天隆祉 惟れ天 祉を隆くし

□地呈祥 〔惟れ〕地 祥を呈す

苗垂三穗 苗は三穗を垂れ

蓮開兩房 蓮は兩房を開く

鄮戸赤雀 鄮戸に赤雀あり

殿庭白狼 殿庭に白狼あり

璧連朝影 璧は朝影を連ね

莫瞻夜光 莫は夜光を瞻る 『（陽・唐韻）

儒童剪髮 儒童 髪を剪り

難提承露 難提 露を承く

水淨洛池 水は洛〔洛〕池に淨らかに

花然寶樹 花は寶樹に然ゆ

偈說多羅 偈は多羅を説き

經文妬路 經は妬路を文にす 『（暮・遇韻）

35

甘泉北接 甘泉 北に接り
細柳南隣 細柳 南に隣りす

河橋鐵鎖 河橋に鐵鎖あり

瀟岸雕人 瀟岸に雕人あり

雲低寶蓋 雲は寶蓋に低れ

40

花大車輪 花は車輪より大いなり

天晴霧解 天晴れ 霧解け

景落霞新 景落ち 霞新たなり』(眞・諄韻)

系縷共纏 系縷 共に纏ひ

燈光相續 燈光 相ひ續く

45

水激珠泉 水は珠泉に激し

沙流銀粟 沙は銀粟を流す

慢口黃金 慢〔慢〕には黃金〔を飾り〕

床雕青玉 床には青玉を雕む』(燭韻)

鳳皇之閣 鳳皇の閣

50

芙蓉之宮 芙蓉の宮

雕欒婉轉 雕欒 婉轉たり

鏤檻玲籠 鏤檻 玲籠たり

窓疎受電 窓は疎りて電を受け

檐迴來風 檐は迴かにして風を來たす

55

瀾生葉紫 瀾は葉の紫なるを生じ

蓮吐花紅 蓮は花の紅なるを吐く

園成樹滿 園成りて樹は滿ち

渠開水通 渠開きて水は通ず

禪永定智炬方融 禪は永く定まり智炬は方に融

らん

60 道成果果累盡空 道は果を成じ果累なりて空を

盡めん』(東韻)

脚韻による段落で七段落、全体は六十句からなっている。

一部の誤脱を補えば、四言句の整然たる銘であることが分かる。(59・60句のみ七言句。)

六 銘文の問題点

「道會寺碑文」銘の部分は多くの問題を含んでいるが、三点のみを指摘しておこう。

第一に、庾信からの影響が顕著に見てとれることである。そのことはすでに論じた。そこには多大な意味があると考えられるが、本稿では触れない。

第二に、仏教が(兄武帝の弾圧によって)深刻な打撃を受け、末法状況を現出したこと、そこから反転して仏教を再興することの論理が語られていることである。これを末法思想と呼ぶことはできないとしても、末法思想につな

がる面を持つことは事実だろう。冒頭1・2句に、

百非體妙 百非は妙を體し

萬德凝神 萬德は神を凝らす

という。「百非」、即ち全ての悪は、実は「妙」つまり仏の真理を、体現している。悪の中に、実は真理が貫かれていて、というのである。こうした論理から銘の文章をはじめることの中に、末法的状況下にあった仏教に対する認識の重さが見える。末法的状況というのは、世界が自己も含めて全て悪の場となっている、ということであろう。廃仏によつて現実には完全に悪におおわれている。だが趙王は、それをこうとらえかえす。

法身豈滅 法身 豈に滅びんや

世眼時淪 世眼 時に淪むのみ

「法身」、つまり真理そのものである仏の本体は、滅んだりしない。ただ「世眼」、世間のまなざしの方が、時によつておとろえ、この世は闇と言ったりするだけなのだ。仏教禁圧と末法的状況を、このようにとらえているのである。だからこそ、次のようにいう。(9・10句)

俱迷苦海 俱に苦海に迷ひてこそ

熟曉良津 熟く良津を曉らん

もろともに「苦海」に迷つてこそ、「熟」、よくよく、彼

岸への良き渡し場を知ることができるのだ。敷衍していえば、末法濁世をくぐりぬけてこそ真理に達することができる、というのである。

仏教再興を慶賀する「道會寺碑文」全体のトーンの中で、こうした認識を銘の冒頭に打ち出す。ここには、華麗な美文の中に秘められた、重い認識が見える。

第三に、皇帝を賞賛し、その聖性をことさらに強調している点である。単に強調するだけではない。それを、仏教によつて論理化しているのである。11・12句で、

我皇御宇 我が皇 宇を御し

超茲文武 茲の文武に超ゆ

というのは、皇帝のずばぬけた聖性の強調である。つづけて13・14句で、

迹染俗塵 迹を俗塵に染め

心標淨土 心を淨土に標す

というのは、心に悟りを抱きつつ俗衆を救うために、「俗塵」、汚濁にみちた世間に生きる者として、「皇帝」を描き出している。そういう生き方は、「菩薩」の生き方だから、菩薩として「皇帝」を描き出したものといえる。これは、皇帝の聖性を仏教の側から補強し、論理化しようとするものだろう。それを総括して、19・20句では、

是曰人王 是れを人王と曰い
兼稱法王 兼ねて法王と稱す

という。「人王」は、帝王をいい、「法王」は通常、仏をいう。「人王」が同時に「法王」であるというのは、直訳すれば、皇帝が同時に仏である、ということである。もちろん、「法王」は、高德な僧侶をさす場合もあり、ここでは、仏法の中心となる王者ということだろう。13・14句からのつながりでかんがえれば、「皇帝」は菩薩であり、地上における仏法の中心「法王」である、という認識なのだ。これは「碑文」31行の、

豈止驅之仁壽、方且歸諸家〔叙〕滅。

〔豈に止だに之を仁壽に驅るのみならんや、方に且に諸を寂滅に歸せしめんとす。〕

とあるのに対応する。歴史上、愚劣な天子の一人とされる宣帝だが、趙王宇文招は、あえてそれを菩薩道を実践する皇帝として描き出しているのである。

七 「道會寺碑文」の位置——結びにかえて

『廣弘明集』卷十「辯惑編」第二之六に、「前僧」王明廣の宣帝（天元皇帝）への上書「周天元立有上事者對衛元嵩」（周天元立ち上事する者有りて衛元嵩に對す）が収められ

ている。武帝をそのかして廢仏を行わしめた衛元嵩への反論という形で、廢仏令の中止を願ったものである。日付は、「大象元年（五七九）二月二十七日」と記されている。⁽¹⁰⁾ それに対する宣帝の返答は、同年四月八日に示され、「今形服不改、德行仍存。廣設道場、欲行善法」（今 形服を改めず、德行を仍ほ存せしめよ。廣く道場を設け、善法を行はんと欲す）というものだった。⁽¹¹⁾ 僧侶たちの姿形は今も庶民と同じままとして徳を積ましめ、道場を設けて善い法を行おうと思う——というのは、仏教復興の方向で検討するが、まだ完全な復興は認めない、ということだろう。

一方、『周書』帝紀第八・「靜帝」によると、大象二年（五八〇）五月に宣帝が崩じた後、靜帝が正式に仏教を復興したことを述べる。

六月庚申、復行佛・道二教。舊沙門・道士精誠自守者簡令入道。

〔六月庚申（六日）、復た佛・道二教を行はしむ。舊沙門・道士の精誠にして自ら守る者を、簡びて道に入らしむ。〕

これらの仏教復興の動きを進めたのは、宣帝・靜帝自身ではなく、実力者楊堅だったとする説がある。⁽¹²⁾ しかしそれは「道會寺碑文」によって再検討を余儀なくされるだろう。

宣帝・静帝に仏教復興を行わしめたのは、宗室の柱だった趙王宇文招だったと考えることができる。もちろん趙王一人の画策ではないだろうが、宗室の諸王たちは、宣帝からうとんじられながらも、北周王朝を守るために、仏教復興による皇室の支持基盤強化、「人王」と「法王」の結合による皇帝権強化をはかったのだ。

「道會寺碑文」は、王明廣の上書（大象元年二月）と静帝による仏教復興令（大象二年六月）の中間に書かれたと考えられる。且つ、大象元年（五七九）十月、道會苑で宣帝が仏像・天尊象と並んで雑戲を見たという時よりも後の時期とするのが妥当であろう。この時期、趙王をはじめ宗室の諸王は長安にいなかった。宣帝によって遠ざけられて、領国に赴いていたのである。そこには実力者楊堅の影響、あるいは画策がみてとれよう。だからこそ趙王は、「道會寺碑文」を記して、これを長安近郊なる道會寺に建て、皇帝による仏教復興を格別に祝い、且つそれを皇帝権の強化と結びつけて描いたのであろう。

仏教復興によって権力基盤を強化しようとするこうした試みは、その後、敵対者である楊堅その人によって、いわば横取りされた。隋の大業三年、倭国から遣隋使が派遣されたことはすでに述べた。「使者」の口上にある「菩薩天

子」は、煬帝を指すか、文帝か、両方の可能性が考えられるが、しかしその「菩薩天子」の像は、聖武天皇『雑集』に残された「周趙王集」によれば、楊堅に殺された趙王宇文招によって、すでに北周末に提示されていたのである。

注

- (1) 田村園澄は、「仏法を重興した『海西の菩薩天子』は、煬帝ではなく、文帝をさしていたと解されます」と述べている。
『仏教伝来と古代日本』講談社学術文庫・昭和六十一年。九二頁。
- (2) 吉川忠夫『興隆・発展する仏教』第1章「隋唐仏教とは何か」、一「隋王朝における仏教再興」一四頁。（沖本克己等編『東アジア仏教史』七巻）
- (3) 東京女子大学古代史研究会編『聖武天皇宸翰『雑集』「釈靈実集」研究』解題（汲古書院。二〇一〇年一月。解題執筆者、丸山裕美子・鉄野昌弘。）に詳細な解説がある。
- (4) 『周書』列伝第五・文閔明武宣諸子「趙僧王招」条による。
- (5) 『雑集』所収「周趙王集」中の作品名は次の通りである。（作品番号は合田時江氏編『聖武天皇『雑集』漢字總索引』清文堂出版、一九九三年による。）
一一一 道會寺碑文 一一二 平常貴勝唱禮文 a 法身凝湛之文（仮題） b 因果冥符之文（仮題） c 無常一理之文
d 五陰虛假之文（仮題） 一一三 無常臨殯序 一一四

宿集序 一一五 中夜序 一一六 藥師齋序 一一七

兒生三日滿月序

(6) 「道會寺碑文」影印は、注(5)に引く合田氏前掲書に掲載されている。

(7) 拙稿「北周趙王の文学と庾信の影響——聖武天皇宸翰『雜集』所収「周趙王集」に基いて——」(『日本中国学会報』第五十六集、二〇〇四年)参照。

(8) 「是歲」二字は、『北史』には無く、その方が良いと考えられる。

(9) 注(7)前掲書参照。

(10) 王明廣「周天元立有上事者對衛元嵩」冒頭。(『廣弘明集』卷十。

(11) 注(10)掲載書末尾。

(12) 『周武法難の研究』野村耀昌(東出版株式会社。昭和五十一年九月)に次のように言う。

(仏教復興は)すべて登位後の行状が淫乱で奢侈に終始した宣帝自身によるものではなく、また幼冲七歳で讓位された靜帝によるものでもなく、事実は宣帝の岳父に当る楊堅が取りしきったものと考えられる。また、宣帝が崩じた直後に当る大象二年(五八〇)六月六日に行われた北周の仏道二教を復する詔も、当然その摂政であつた楊堅の意志によるものであると考えられるべきである。(二五四頁)

〔資料〕「道會寺碑文」翻字

以下は「道會寺碑文」の翻字であり、一行十八字、八十五行という聖武の表記に従っている。翻字・句読は、全て筆者による。聖武の誤記と思われるものについては、傍に漢数字を付し、末尾にその訂正字を「↓」で表記している。闕字についてはそのままとしてある。

道會寺碑文

1 若夫九成圖蓋。則康陽垂日。四柱方輿。則凝陰戴升。而君稱龍首。既泣曆於九宮。帝曰蛇身。遂亥交於六位。是知鬼神無所逃形。天地之情盡矣。豈似真如寂絕。非千尺之可求。實相冥言。非5 一音之可證。毛滌海水。算數之理無方。塵折須彌。測量之情逾遠。昔者吾百羅漢。同來舍衛之城。十千天子。共詣迦陵之國。乃見安居鹿苑。說法鷄園。滿面含光。通身微咲。自月落金棺香炭。雙林變色。四馬生風。若使圖光不寫。則度敬10 摩訶。方墳莫樹。則栖庇焉奉。是以商人採寶。則龍宮自開。梵志求香。則海潮仍落。波斯壇越。圖紺髮而昇天。須達長者。布黃金而滿地。卅二相。傳妙質而無窮。八斛四升。散全身而不滅。漢皇宵夢。啓正教於山東。吳宮夜明。悟斜心於江左。

15 皇帝沈璧握圖。懷珠受曆。幽房貫月。華渚落星。

都平陽而受禪。坐玄扈而披圖。長羸炎景。服絺葛而繼百王。月紀玄英。衣鹿裘而朝萬國。蓬萊

羽客。棄神仙戾止。渭濱隱士。捨垂釣而來王。至

如玉盤銀甕之祥。赤獸白禽之瑞。雙苗三脊。以

20 表至孝之徵。神雀靈鳥。乃應大平之兆。丹兩鳳。

夜宿華山之桐。河漢雙龍。朝遊葛陂之水。接禮

慈愛之文。敵德戢兵之武。安上治民之禮。移風

易俗之樂。若乃金繩玉字之書。石架銀函之部。

黃封萬卷之言。青首五車之冊。占月司星之術。

25 觀風候氣之儀。中臂礙柱之精。驚猿落鴈之巧。

緣情則飛雲玉髓。落紙則垂露銀鈎。白石紫芝。

懸譜藥姓。四童九轉。遙識方名。投壺則仙女含

咲。彈碁則玉女度河。可謂唯聖唯神。多才多藝。

上林秋菟。書而莫盡。睢陽竹簡。載而弗窮。雖復

30 迹住有爲。而心存遣相。達五家非已。識三相莫

停。汲亥群迷。紹隆釋典。豈止驅之仁壽。方且歸

諸家滅。乃逮斯利。厥名天會。其寺蓋昔某官姓

名所興也。觀其揆日面方。崇基架宇。外誼王舍。

內

35 祇園。但以春灰數動。秋火屢移。臺毀花萎。蓋彫

香滅。蕭々虛牖。或似相如之臺。寂々疎扉。乍同

揚子之宅。乃於舊所。經始莊嚴。荊山春嶺之珍。

合浦朱提之寶。並充隨喜。盡用行檀。轉埴陶人。

揮斤好匠。莫不椒泥桂柱。彩壁梅梁。綺井舒荷。

40 雕楹散藻。三處紅蓮之殿。五時白鶴之官。月映

瑠璃。帶春風而不墮。雲連馬腦。似秋雨而將垂。

摩竭國中。翻慙淨土。毘耶城裏。到愧伽藍。天樂

恒調。不待周瑜之顧。空香自吐。無勞荀彧之衣。

桂影澄淵。即是沈河之壁。榆落水然。投渭之錢。

45 吉士詵々。棒乳糜而競入。名僧濟々。抱應器而

知歸。是知緣覺爭飛。終留世界。聲聞聽響。遂至

他方。法雨纔沾。枯苗即潤。慧燈暫照。暗空方明。

現五縛於離車。伏雙魔於道樹。鵠憑威而向影。

大樂法而昇階。寺主比丘某甲。僧徒英雋。法侶

50 高明。心伏慳貪。身行忍辱。若夫酒泉開士。唯學

禪友。鉅鹿沙門。止通經論。未有守護雕龕。堅持

寶刹。

皇帝輟萬機之務。隆四海之尊。輦詣花園。輿廻

香苑。六龍嚴設。四校廣陳。懸豹尾於屬車。望靈

55 鳥於大史。鹿盧之劍。本帶龍文。宛轉之弓。舊合

蛇影。於是頂戴天人。歸依正遍。然後登寶座。撫

金机。潜名教。闡大乘。法勝毘日雲。^八義均廢疾。呵

梨成実。事等膏。廣說涅槃。^九迦葉起問。高談般若。

善吉先知。遣有爲住無爲。滅執相存忘相。練石

60 鉢於貢金。變醍醐於乳酪。法華窮子。始悟慈顏。

火宅童兒。方知離苦。足使提舍恥其頭燃。納衣

慙其斷見。爾其處也。國稱四塞。地曰一金。一鳥

翱翔。周王杖鉞。五星夜聚。漢帝治兵。綠蔓蒲陶。

斜懸別館。青苗目荷。遙映離宮。都尉誠船。^十獨有

65 昆明之水。將軍置陣。唯餘細柳之營。南望上林。

想仙童之來晚。西瞻青綺。思召子之菰甜。正對

旗亭。則五層迢遞。傍臨峻堞。則百雉逶迤。欲令

勝葉恒傳。福田永播。而靈光之殿。古字難存。羽

陵之山。新書易蠹。唯當一刊玄碣。萬古常觀。豈

70 使襄陽水中。獨有鎮南之頌。燕然山上。唯勒車

騎之碑。舞蹈希有。乃爲銘曰。

百非體妙。萬德凝神。空因相顯。理寄言申。赴機

曰應。反寂稱眞。法身豈滅。世眼時淪。俱迷苦海。

熟曉良津。我皇御宇。超茲文武。迹染俗塵。心標

75 淨土。道牙廣潤。勝幢高聳。靜監有空。緣思愛取。

是曰人王。兼稱法王。惟天隆祉。地呈祥。苗垂三

穗。蓮開兩房。鄼戶赤雀。殿庭白狼。璧連朝影。莫

瞻夜光。儒童剪髮。難提承露。水淨洛池。花然寶

樹。偈說多羅。經文妬路。甘泉北接。細柳南隣。河

80 橋鐵鎖。瀟岸銅人。雲低寶蓋。花大車輪。天晴霧

解。景落霞新。糸縷共纏。燈光相續。水激珠泉。沙

流銀粟。慢黃金。^{十一}床雕青玉。鳳皇之閣。芙蓉之宮。

雕變婉轉。鏤檻玲籠。窻疎受電。檐迴來風。瀾生

葉紫。蓮吐花紅。園成樹滿。渠開水通。禪永定智

85 炬方融。道成果々果盡空。

一圖↓圓 二泣↓治 三吾↓五

四圖↓圓 五大↓太 六家↓寂

七官↓宮 八日雲↓曇 九盤↓槃

十誠↓試 十一洛↓珞 十二慢↓幔

(東京女子大学)